

起源と本質

Essentiality of Origin

星 野 徹*

Toru HOSHINO

世界には無数のものがある。地球や火星やボチやタマやプーチンやオバマから、モナリザや考える人や東京タワーにいたるまで、無数のもので世界は満たされている。これらのものをこれらのものたらしめている本質的特性は存在するだろうか。たとえば、タマが必ず持ち、タマからそれが失われてしまえばタマがタマではなくなるようなタマの本質のようなものが存在するだろうか。

個体の持つそのような本質的性質の一つとして、クリプキが個体の起源を挙げていることはよく知られている。クリプキによれば、エリザベス2世が実際とは別の両親から生まれることはありえなかったのである。エリザベス2世が王家の生まれではなかったということが発見されることならばありうることである。しかし、エリザベス2世がアルバートとエリザベスの子供であることが事実ならば、エリザベス2世がアルバートとエリザベス以外の両親から生まれることはありえなかったのであり、仮にエリザベス2世とうり二つの人物がいたとしても、彼女がアルバートとエリザベスの子でなければエリザベス2世ではないのである。また、目の前にあるこのテーブルが特定の木材によって作られたのだとすれば、これが鉄から作られたり、あるいはよく似た別の木材によって作られたり

したことはありえなかったのである(Kripke, 1980, pp. 110~114)。

はたして、タマやプーチンやモナリザやこのテーブルには本質的性質があるのだろうか。また、起源はそれらの本質的性質とみなすことができるだろうか。そもそも、個体の起源とは何だろうか。個体の本質とその起源をめぐる問題について考えてみたい。

1 動物と芸術作品

ものが突然生じることは普通はない。ものの誕生には前史がある。起源がものの本質であるとすれば、ものの誕生にかかわる無数の要因のうち、どれが当の起源とみなされることになるのだろうか。

たとえば、モナリザはレオナルド・ダ・ヴィンチがジョコンド夫人をモデルとして描いた肖像画であると考えられている。こうした通説が事実だと仮定しよう。それでは、モナリザが現実とは別のキャンバス上に描かれることはありえただろうか、あるいは、現実とは別の絵の具を使って描かれることはありえただろうか。現実とは別のキャンバスに現実とは別の絵の具で、ダ・ヴィンチによってジョコンド夫人をモデルとして描かれた肖像画はモナリザだろうか。また、ダ・ヴィンチではなく、若きラファエロがジョコンド夫人をモデルとして、現実のモナリ

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授、哲学

ザと同じカンヴァスと絵の具を使って、現実のモナリザと寸分違わず描いた肖像画はモナリザだろうか。さらに、モナリザがジョコンド夫人の肖像画ではなく聖母像であることはできただろうか。ダ・ヴィンチが特定のモデルを使わずに、現実のモナリザと同じカンヴァスと絵の具を使って、モナリザと見分けがつかない絵を聖母像として制作したとすればどういうことになるのだろうか。

クリプキの挙げるテーブルの例とは違って、モナリザの本質があるとしても、それは特定の素材によって作られたことにあるわけではないように思われる¹。違うカンヴァスに描かれていたとしても、違う絵具で描かれていたとしても、ダ・ヴィンチがジョコンド夫人像として描いたのであればそれはモナリザだ、と多くの人は考えることだろう。

モナリザがフレスコ画でありえたかどうかという問いとなると、どのように答えるべきか、私にははっきりとはわからない。しかし、モナリザがフレスコ画でありえたと考えることは少なくとも不可能であるように思われる。その場合、モナリザの本質はダ・ヴィンチの意図やダ・ヴィンチの心の中にある原型のようなものに求められることになるだろう。モナリザの原型を「モナリザ性」とよぶことにしよう。モナリザとはモナリザ性の実現されたものであり、どのような素材によろうと、モナリザ性の実現されていればそれはモナリザなのである。

モナリザが聖母像であったり、モナリザにひげが描かれていたりすることはありえたであろうか、あるいは、モナリザがキュビスム的手法で描かれていることもありえたであろうか、という問いはさらに微妙である。これらの問いは、モナリザ性の本質に関する明確な判断基準を要求するが、そのようなものがあるのかどうか判然としないからである。

しかし、モナリザをラファエロが描くことは可能であつたのだろうか、という問いに対する答えは明白であるように思われる。現実のモナリザと同じカンヴァスと絵の具で、同じ人物をモデルに、同じような仕方でも描かれたとしても、それを描いたのがダ・ヴィンチ以外の人物であれば、それはモナリザではないだろう。ラファエロが心に抱いたであろう原型が、現実のダ・ヴィンチが抱いた原型と質的に区別ができないようなものだとしても、ラファエロの心の中にある原型はモナリザ性を持たないだろう。モナリザ性のあらゆる特性を数え上げることは不可能だとしても、原型がモナリザ性を持つためにはそれがダ・ヴィンチの心に宿ることが必要であるということだけは確かであるように思われる。

人や動物にとっては特定の両親から生まれたということが、テーブルや船にとっては特定の物質によって作られたということが、そして、絵画や彫刻にとっては特定の原型が現実化したものであるということが、その本質であるとするれば、それはどのような理由によるのだろうか。なぜバラク・オバマや田中将大や星野徹が現実の両親とは別の両親から生まれることがありえなかったのだろうか。バラク・オバマや田中将大や星野徹が別の両親から生まれることがありえなかったのは、「バラク・オバマ」や「田中将大」や「星野徹」が特定の両親から生まれた子供を指すために導入された名前だからだろうか。

オバマが生まれたときに、オバマの両親が「この子にバラクという名をつけよう」と意図したとしよう。そのように名づけられた人物が、オバマの両親以外から生まれることはありえたであろうか。

この場合、バラク・オバマが現実のオバマの両親から生まれたことはアプリアリである。「バラク・オバマ」はオバマの両親から生まれた特

定の子供を指す名前だからである。それでは、オバマが現実の両親から生まれたことがオバマの本質の一つだとすれば、それは、オバマが現実のオバマの両親から生まれたことがアプリアリであるからだろうか。

そうではないように思われる。世界中のすべての個体に名前があるわけではない。人間には生まれたときに名前が付けられるだろうが、飼い犬や飼い猫やパンダを除くほとんどの動物には名前がない。それら名もないクジラやライオンやカバも特定の親から生まれたはずである。そして、起源が個体の本質であるという説が正しいとすれば、それぞれのクジラやライオンやカバが現実の親とは異なったクジラやライオンやカバから生まれることはありえなかったはずである。タマやポチやシンシンは起源がその本質であるのに対して、名もない野良猫や野生のゴリラはそうではないということは考えにくいことであるからである。人工物となればなおさらである。一部の船や宇宙船を除けば、人工物に命名する習慣を我々は持っていない。それにもかかわらず、クリプキが正しければ、あの掃除機やこの机や隣の部屋のテレビは、現実の物質と別の物質によって作られることはありえなかったことになるのである。

さらに、名前を持つすべてのものが、そのものが誕生するとすぐに名前を与えられるわけでもない。モナリザはその一例である。ダ・ヴィンチ自身がモナリザを「モナリザ」と呼んだわけではない。多くの絵画作品名は後世の人物によるものである。

起源が個体の本質であるという直観は以下のような日常的ケースの延長上にあるのだろう。電車の向かいの席に座った人が真っ黒に日焼けしていたとしよう。肌がチョコレート色をしているので、私は心の中でその人を「ショコラ」と呼ぶことに決めた。「どうしたのだろうか、

まだシーズンでもないのにショコラさんは海水浴にでも行ったのだろうか、それとも外回りの仕事をしている人なのだろうか。あれだけ紫外線を浴びたら肌に良くないだろうに」などなど、私は想像してみる。ところで、ショコラさんの肌がもう少しだけ白くなることは可能だろうか。もちろんである。しばらく日光を浴びないようにすれば、あるいは、外出するときには日焼け止めを塗ったり日傘をさしたりすれば、少しずつ肌も白くなって行くに違いない。それでは、未来のショコラさんの肌ではなく、現在のショコラさんの肌がもう少し白いことも可能だったのだろうか。私は、肌の黒さという際立った特性に着目することによってたくさんの人の中からショコラさんを選び出し、名前を与えたのである。それにもかかわらず、ショコラさんが今この瞬間に黒い肌をしていないことはやはり可能であったことだろう。たとえば、ショコラさんが一か月前から部屋に閉じこもっていたり、日焼け止めを塗ったりしていれば、今この瞬間にももう少し白い肌をしていたことだろう。未来のショコラさんを想像するときも、反事実的なショコラさんを想像するときも、私は同じような事をしている。一方では、ショコラさんにこれから起きるであろうこととその結果を想像し、他方では、過去の彼に起きたであろうこととその結果を想像しているのである。次の場合も同じである。

太った野良猫が我が家に住み着いたとしよう。その猫は「タマ」という名前で呼ばれることになった。タマがこれからスリムになることはあるだろうか。私がえさを与えるのを忘れたり、タマがダイエットしたりすればタマはスリムな猫になるだろう。それでは現在のタマがよりスリムであつたりより太っていたりすることはありえたのだろうか。我が家に現れる前にひもじい野良猫暮らしをしていたとすれば、タマは今よ

り痩せていただろうし、裕福な家の飼い猫だったならば、今よりさらに太っていたかもしれない。いずれにしても、タマが現在適度に太っていることはタマの本質的性質ではないだろう。

私はタマのこれまでの生活に思いをはせてみることができる。こいつはいったいこれまでどこで何をしていたのだろうか。野良猫で、ほかの猫たちと縄張り争いを繰り広げていたのだろうか。そうだとすれば、顔にひっかかれた傷があってもおかしくないだろう。あるいは、飼い猫で子供の遊び相手になっていたのだろうか。すると、子供にひげを三本抜かれて今とは見た目が少し違っているなどということもありえたかもしれない。こうした思いはタマの子猫時代にまでさかのぼることができる。タマが子猫のころに人間にいじめられた経験があったとしたら、警戒心の強い猫になり、人間に近づいて餌をもらおうとすることもなく、ずっと野良猫生活を続けていたかもしれないし、小さいころに裕福な家で育てられ、マグロばかり与えられていたら、今頃は普通のキャットフードには見向きもしなかったかもしれない。

タマが我が家に居着いていること、丸々として人懐っこいこと、キャットフードを好んで食べることはたままのことである。タマの育ってきた境遇が異なっていたらタマは人に懐かなかったかもしれないし、マグロしか食べなかったかもしれない。しっぽはもっと短かったかもしれないし、声ももっとしゃがれていたかもしれない。以前交通事故にあっていたらタマは三本足になっていたかもしれない。さらに、タマは三毛であるが、チャトラであったかもしれない。三毛として生まれたタマは、テンが夏毛から冬毛に変わるように、何かの拍子にチャトラに変化したかもしれないからである。こうして、現実のタマの性質の多くを失ってもその猫がタマであることは可能であるように思われる。人

嫌いでも、マグロしか食べなくても、しっぽが少し短くてもタマはタマである。

タマはどのような猫でありえたのだろうかと思うとき、私はこのようにタマの生涯をさかのぼってみる。そして、ある時点で、タマにあることが生じていたらタマはどのようになっていたのだろうか、と考える。こうして、私は、現実のタマとは似ても似つかない様子をしたタマを想像することができる。しかし、タマが実際とは別の猫から生まれたかもしれないと思ってみることは難しい。それは、生まれる前のタマに生じた出来事がその後のタマの生涯にどのような影響を及ぼすだろうか、と想像することであるからである。タマに関する反実仮定の起点は特定の親から生まれたばかりのタマであるほかはない。タマの過去についての想像は、通常、タマの誕生の時点で行き止まりになるのである。特定の起源をもつことが個体の本質的性質の一つであるという直観は、個体に関する反実仮定の起点が起源におけるその個体にあるという事実によるものであるように思われる。実際、クリプキは次のように述べている。

通常、ある個体にあることが生じえたのだろうかと直観的に問うとき、われわれは、宇宙の歴史がある時点までは現実と同じように進行しているが、その時点を境に現実とは異なった道を進み、その結果、その対象もそれ以降、現実とは異なった変遷をたどることになるといったことがありえたかどうか、と問うのである。おそらく、この特徴は本質に関する一つの一般原理として立てられるべきであろう (Kripke, 1980, p. 115)。

ただし、クリプキは何が個体としての人や個体としての動物の起源とみなされるべきであるかということに関して、次のような仕方でいわ

ばその条件を緩和している。

現実の歴史から道が分かれる時点は、ときには、その対象自身が創造される以前のこともかもしれないということに注意すべきである。たとえば、私がそこから生まれてきた受精卵が傷ついていたら、その時点で私が存在していないとしても、私は障害を持っていたことだろう(ibid.)。

タマやオバマの起源は、タマやオバマが姿を現した時点を越えて、タマやオバマの源となった卵子の受精の瞬間にまでさかのぼることができるというわけである。

モナリザやピエタのような芸術作品は、起源が創造の時点を越えることがあるということの一例である。それでは、モナリザやピエタの起源を、ダ・ヴィンチやミケランジェロをさらに越えたところに求めることはできるだろうか。起源はどこまでさかのぼれるだろうか。

真の傑作は神が与えた靈感に導かれることによってのみ創造されうるのだとしよう。その場合、芸術家は神の恩寵の働く場ということになるだろう。モナリザもピエタも神からの賜物である。すると、ダ・ヴィンチがモナリザを描き、ミケランジェロがピエタを制作したのは偶然であつたことになる。靈感がラファエロに舞い降りればラファエロがモナリザを描いていたことだろうし、パレストリーナに舞い降りればパレストリーナがピエタを作っていたかもしれない。いずれにしても、モナリザやピエタの本当の起源は、ダ・ヴィンチやミケランジェロではなく神の心の中にあることになる。モナリザ性もピエタ性も神の中に先在していたのである。

ところで、ある人間が現実の両親とは別の両親から生まれたと想定することには特別な困難はないと主張する哲学者がいる²。確かに生ま

れてからかなりの年月が経過した人間や歴史上の人物に関してならば、その人間が現実の両親とは別の両親から生まれたかもしれないと想定することは、一見したところ可能に思われるかもしれない。しかし、問題は、生まれたばかりの赤ちゃんを前にして、「この赤ちゃんは別の親から生まれたかもしれない」と試してみることは本当にできるだろうか、ということである。

たった今、母親から出てきた赤ちゃんが、別の女性から生まれたかもしれないと想像することができるとすれば、その人はどのような事態を想定しているのだろうか。クリプキがある個所で示唆しているような、受精卵が現実の母親とは別の女性に移植されたといった類の想定を除けば、三つの可能性が考えられるだろう。

一つ目は、この赤ちゃんは、世界に登場する以前からずっと存在していたと想像する場合である。それがどこかはわからない。どこかわからないところで、この赤ちゃんは、今と同じ外観と同じ内部構造を持って存在していたのである。そして、この母親の体を通してこの世界に登場したのである。なぜこの母親が選ばれたのかもわからないが、この母親でなければならぬ理由はないに違いない。もしかするとこの赤ちゃんは、隣の病室にいる女性から生まれたかもしれないし、ブラジルにいる女性から生まれたかもしれない。とにかく、この赤ちゃんがこの母親から生まれたのはたまたまのことなのである。この赤ちゃんの真の起源がどこまでさかのぼれるのか、だれにもわからない。しかし、この母親がこの赤ちゃんの真の起源でないことだけは確かなのである。

あるいは、この赤ちゃんと同じ性質を持つ赤ちゃんがこの女性ではなく別の女性から生まれたならば、その赤ちゃんは他ならぬこの赤ちゃんなのかかもしれない。この赤ちゃんとうり二つの赤ちゃんがこの女性ではなく別の女性から生

まれることは可能である。だから、この赤ちゃんが別の女性から生まれることも可能だったのである。もちろん、別の女性から生まれた場合、その赤ちゃんは違う両親を持つことになるだろうし、異なった場所と時間に生まれることになるだろう。したがって、その赤ちゃんの、周りの人や時間や空間との関係は、現実の赤ちゃんのそれらとの関係とは異なるだろう。しかし、こうした関係的性質を除くすべての性質が現実の赤ちゃんと同じならば、その赤ちゃんは目の前のこの赤ちゃん自身なのである。このように、この赤ちゃんのこの赤ちゃん性、この赤ちゃんのこのものの性が、普遍としての性質の束に還元されるならば、この赤ちゃんが別の両親を起源として持つことも可能であったことになるだろう。

三つ目の可能性は二つ目の対極にあるものである。個体の本質は個体と独立に存在するとすれば、この赤ちゃんが別の親から生まれることもできることになるだろう。織田信長であるという性質やバラク・オバマであるという性質は、実際に織田信長やバラク・オバマが存在するかどうかにはかかわりなく、ずっと存在していると考えればよいのである。そして、織田信長が生まれるとは、織田信長であるという性質、すなわち織田信長性の実現することであり、バラク・オバマが生まれるとは、バラク・オバマ性の実現することであるのである。ちょうど、神がダ・ヴィンチを通してモナリザ性を実現したように、織田信長性は、現実世界における織田信長の母親を媒介として実現されたのである。そして、靈感がラファエロに降り注げば、ラファエロからモナリザが生み出されたであろうように、何かの拍子で、織田信長が別の親から生まれたかもしれないのである。

個体が性質の束に還元されないこのものの性を持ち、かつ、その個体が存在しなければその個

体のこのものの性も存在しないとすれば、そのような個体は、現実の起源とは別の起源から生じることにはありえなかったと言ってよいだろう。そして、個体のこのものの性が性質に還元されるという説も、個体のこのものの性が個体の存在と独立に存在するという説も、ともに私は受け入れることはできない³。織田信長が現実の親とは別の親から生まれることはやはり不可能であった、と言うべきであるように私には思われる。

芸術作品の起源について一言付け加えておきたい。ルーヴルのモナリザを前にして、これが別のカンヴァスでできていることがあり得たろうかと問う人がいるとしよう。その人が、芸術を全く解さない即物的な人間だとしよう。その人の目の前にあるのは単なる色のついた板である。色のついた板ならば、別の板を起源とすることはできないだろう。これが色のついた板ならば、特定の板でできていることはこれの本質なのである。

様々な人や物がモナリザの誕生にかかわっている。その中のどれがモナリザの本質的起源であるかということは、モナリザをいかなるものとして見るかによる。モナリザが美術作品ならば、ダ・ヴィンチが本質的起源になるかもしれないし、「モナリザ」が色のついた板を指すなら、その板で作られていることが本質的起源となるだろう。また、モナリザが原子の塊ならば、モナリザの起源は原子の誕生の時点までさかのぼるだろう。しかし、だからと言って、起源が名目的なものになるわけではない。ダ・ヴィンチもダ・ヴィンチの意図もジョコンドも木製のカンヴァスもカンヴァスを構成する原子も、いずれも実在するのだし、いずれもモナリザの誕生に関与しているからである。同じことがタマやバラク・オバマのような動物や人についても言えるだろう。オバマが原子によって構成されているのは確かである。しかし、オバマと呼ばれ

る人が実在する限り、そして、オバマの持つオバマ性が存在し、オバマ性の存在がオバマ自身の存在に依存する限り、オバマが特定の親から生まれたということはオバマの本質であるとみなされなければならないだろう。

2 始まりと終わり

起源と言っても、人や猫や芸術作品の起源と、机や船のような人工物の起源では意味合いが異なる。人や猫や芸術作品の起源とはそれらの生みの親のことである。オバマの起源はオバマの両親であり、モナリザの起源は、神による靈感を無視することが許されるならば、ダ・ヴィンチである。それに対して、机や船の起源と言うとき、クリプキが念頭に置いているのは、机や船が生み出されたときにそれらを構成していた物質のことである。

人工物は古びて行く。机も船も、時の経過とともに傷がつき、板がはがれてくる。古くなった机や船は、塗装をしたり、板を張り替えたりして長持ちをさせることができる。こうして修理された机や船は、修理される前と同じ机であり同じ船である。机や船の部分がすべて入れ替わってしまうという場合はあまりないかもしれないが、理屈の上では考えることができる。そのようなときでもやはり同じ机や同じ船が存在し続けているとみなされることだろう。このように、部分が入れ替わりながら同一のまま存在し続ける人工物も、起源がその本質的性質の一つであるとクリプキは考える。しかし、それは人や美術作品の場合ほど自明のことではないように思われる。

中古で買った車や家具が、何度も修理を経た代物で、最初の部品や板はすべて取り換えられていたとしよう。前の所有者がもう少し丁寧に使っていたならば、当初の部品や板も少し

は残っていたかもしれない。したがって、たとえば中古のこのテーブルがこうした板でできているのは偶然のことである。ところが、人工物の起源が製造時の物質にあるのだとすれば、このテーブルは実際に製造されたときに使われた板と別の板によって作られることはありえなかったことになる。目の前のテーブルが、今、このときに、別の板でできていることはありえたにもかかわらず、私のあずかり知らないこのテーブルの製造過程において、このテーブルが実際とは別の板によって作られることはありえなかったのである。別の板を使って作られた机が、たびかさなる板の張替えによって、目の前のこのテーブルと全く同じ板によって、隅から隅まで全く同じように構成されるようになったとしても、それはこのテーブルとは別個のテーブルなのである。これはとても奇妙なことではないだろうか。具体例で考えてみよう。

私が中古の船を買ったとしよう。その船（私は「テセウスⅡ」と名付けた）は年代物で、修理に修理を重ねて、そのたびに板が取り替えられはしたものの、原形は保ったままであると聞かされている。購入時に船は100枚の板($c_1, c_2, c_3, \dots, c_{100}$)からできていたとしよう。私は、テセウスⅡは最初はどのような板で作られていたのだろう、と想像してみる。船の修理場にいろいろな船から取り外された板や、これから取り付けられる板が積み上げられているとすれば、それらの板の中のどれがテセウスⅡのもともとの板だったのだろうか、と試してみるができる。 $a_1, a_2, a_3 \dots$ だろか、それとも $b_1, b_2, b_3 \dots$ だろか。こうした可能な組み合わせのうち、現実と合致するのは一つだけである。それが、 $a_1, a_2, a_3, \dots, a_{100}$ であったとしよう。最初は a_1 が c_1 と取り替えられ、次には a_2 が c_2 と取り替えられ、100回の修理を経て現在に至ったのである。すると、修理の結果 $c_1, c_2, c_3, \dots, c_{100}$ によって構成される

ことになった船が仮にあったとしても、それが、たとえば、初めに $b_1, b_2, b_3, \dots, b_{100}$ によってできていたとすれば、その船はテセウスⅡではないのである。

私はテセウスⅡの未来についても思いをめぐらせてみる。テセウスⅡは航海中に損傷するかもしれない。テセウスⅡはそのたびにこの修理場で板を交換してもらうことになるだろう。そして、最後はどこかで焼却処分されるのだろうか。テセウスⅡの修理にはどの板が使われるのだろうか。テセウスⅡは廃船のときにはどの板でできているのだろうか。 a_1, a_2, a_3, \dots だろうか、それとも b_1, b_2, b_3, \dots だろうか。未来は確定していないとしても、多くの組み合わせのうち、現実となるのはやはり一つだけである。しかし、未来の場合、どのような板を使って修理が行われようとも、テセウスⅡが存在し続けることに変わりはない。実際のところは、 b_1, b_2, b_3, \dots の板を使って修理されることになるのかもしれない。未来のテセウスⅡは b_1, b_2, b_3, \dots から構成されることになるのかもしれない。しかし、 d_1, d_2, d_3, \dots を使って修理されたとしても、 e_1, e_2, e_3, \dots を使って修理されたとしても、その船はやはりテセウスⅡなのである。

私はテセウスⅡの未来を想像する際、初めに一枚の板が交換され、次いで二枚目の板が交換され、その次には三枚目の板が交換され、というように、板が順次交換されてゆく様を想像する。現在のテセウスⅡを起点として、枝分かれする無数の線が未来へ延びて行く。その先端にあるのが廃船目前のテセウスⅡである。全く同じような仕方、私はテセウスⅡの過去を思い描くことができる。未来の想像のフィルムを逆回しにすればよいのである。直前には一枚交換され、その前にはさらに一枚、さらにその前にはもう一枚というように。そして、枝分かれした無数の道の先端にあるのが、目の前にある船

の誕生直後の姿である。目の前にある船は、こうした無数の可能性のうちの一つのルートをとってここに存在しているのである。こうして、未来へ延びる道と過去へ延びる道は、現在のテセウスⅡを中心に対称的な形をとる。未来に向かう道の先にある無数の船は、いずれも未来のテセウスⅡの可能なありかたであり、可能的なテセウスⅡである。しかし、過去に関してはそうではない。過去への道の先にある可能的船のうち、テセウスⅡであるのは一つだけ、すなわち現実のテセウスⅡの起源となった船だけである。それ以外の無数の可能的な船は、修復の結果、現在目の前にある船と同じ板でできた寸分違わぬ船になることができたとしても、どれも可能的なテセウスⅡではないのである。

これはやはり奇妙なことではないだろうか。なぜテセウスⅡは廃船時には無数の姿を取りうるのに、誕生時には一つの姿しかとりえないのだろうか。過去と未来の非対称性は何に由来するのだろうか。過去は確定しているが未来は未確定だということだろうか。そうではないように思われる。過去だけではなく現在も確定している。今、テセウスⅡは板 c_1, c_2, c_3, \dots によってできている。しかし、テセウスⅡは b_1, b_2, b_3, \dots を使って修理されていたかもしれない。そうすれば、テセウスⅡは現在 b_1, b_2, b_3, \dots によって構成されていたことだろう。

ところで、クリプキは『名指しと必然性』の注 56 で、人工物が起源において特定の物質によって作られたならば、そのものが別の物質によって作られることはありえなかったという原理に対して次のような証明を与えている。

「B」をあるテーブルの名前（固定指示子）とし、「A」は現実とそのテーブルがそこから作られた木片を指すとしよう。「C」は別の木片を指すとしよう。そして、現実世界におけ

と同じように B が A から作られるが、それと同時に、C からもう一つのテーブル D が作られたと仮定しよう。すると、この場合、 $B \neq D$ である。それゆえ、D だけが作られて、A からはいかなるテーブルも作られなかったとしても、D は B ではないであろう (Kripke, 1980, p. 114, n. 56)。

クリプキのこの証明は、それが妥当だとすれば、多くを証明しすぎている。この方法を使えば、起源における物質だけではなく、中間段階における物質も、終末における物質も、どの時点における物質も、そのテーブルであることにとって不可欠であるということを証明することができてしまうからである。

私の前にある机 F が、現在、木片 E によって構成されているとしよう。別の木片 G によって構成されたこの机と同じタイプの机 H が現在存在しているということは可能なことである。その場合 $F \neq H$ である。それゆえ、現在、E からはいかなる机も作られておらず、代わりに G からこの机そっくりな机ができていたとしても、それはこの机ではないことになるだろう。それゆえ、クリプキが正しければ、この机が現在、木片 E 以外のものによって構成されていることはありえないことになるのである。これは、人工物は部分が入れ替わりながらも同一性を保ったまま存在し続けることができるという我々の直観に反することである。

クリプキの証明は誤っていると私は思う。証明の欠陥は、「D」を「B」と同様、特定のテーブルの名前とみなしている点にある。「A」と「C」は現実存在する特定の木片を、「B」は現実存在する特定のテーブルを、それぞれ指す固定指示子である。それに対して、D は現実のテーブルではない。木片 C によって作られたかもしれないテーブルである。「D」は固定指示子では

なく、「木片 C によってできたテーブル」という記述の代わりをしている非固定指示子と考えられるべきなのである。C でできたテーブルであればそれが何であれ D なのである。ちょうど、アメリカで行われる 45 回目の大統領選挙に勝利した者は、それが誰であれアメリカ第 45 代大統領であるのと同じことである。

「D」が非固定指示子ならば、 $B \neq D$ であってもそれは必然的なことではない。場合によっては B と D は同一であることもある。たとえば、ある可能世界において、テーブル B が修理を重ねた結果木片 C によって構成されるようになったとすれば、その可能世界におけるテーブル D は現実世界におけるテーブル B と同一でありうるのである。

特定のテーブルであることにに関して、起源における木片は、それ以降の時点における木片とは違う特権的役割を持っているのは本当のことなのか、また本当ならばなぜそうなのか、クリプキの注は明らかにしてくれていないと言すべきである。

過去と未来の、また、始まりと終わりの非対称性は、船や机のような人工物ではなく、タマやオバマのような生命体に関してならば確かに存在している。

私はタマの行く末を思ってみる。タマはどのような生涯を送るのだろうか。ブラジル行きの貨物船に紛れ込んで、ブラジルの大農場でネズミ取り猫として活躍し、ブラジルで大往生を遂げるのだろうか。野良猫生活に舞い戻り、ボス猫として最期を迎えるのだろうか。それとも、道路に飛び出して車にひかれてしまうのだろうか。こうした想定は、いずれもタマそのものについての想定であり、そのどれもがタマにとっては可能な未来である。

私はタマの誕生についても想像してみる。タマはどの猫から生まれたのだろうか。しばらく

前に我が家に出入りしていたあの猫だろうか、近所の空き地にいたあの猫だろうか、それともブラジルから密航してきた猫だろうか。誕生に関する想像も、いずれもタマに関するものであり、いずれもタマの可能な過去についての想像であるように思われるが、それらのうち、可能なのは現実のタマの誕生と合致するものだけである。それ以外は、タマではなく、タマによく似た別の猫についての想像になってしまうのである。

生涯が確定している歴史上の人物についてもタマと同じことが言える。織田信長が本能寺で自害せずに天下統一を成し遂げたと想像することもできるし、平凡な農民として生涯を終えたと想像することもできる。織田信長の生涯について想像可能なことは形而上学的にも可能である。実際に、織田信長は天下を統一したかもしれないのである。しかし、織田信長の誕生に関してはそうではない。織田信長性が現実の織田信長と独立に存在すると仮定するのでない限り、織田信長が現実の親とは別の人間から生まれると想像しようとしても、織田信長とそっくりな人間がその人間から生まれると想像することにはかならないのである。

織田信長が天下を統一することは可能であったが、現実には彼は本能寺で自害したのならば、本能寺で自害したということは、可能的織田信長から現実の織田信長を分かち性質の一つであり、現実の織田信長の持つ本質的性質であることになる。同じように、織田信長の生涯に織田信長が行った行為や、織田信長が持つことになった身体的、心的性質は、いずれも可能的織田信長から現実の織田信長を分かち、現実の織田信長の本質的性質である。しかし、織田信長が特定の親から生まれたことはそうではない。織田信長が特定の親から生まれたことは、可能的織田信長から現実の織田信長を分かち性質では

なく、他の人間から織田信長を分かち織田信長の本質的性質なのである。

船や机のような人工物が特定の物質によって製作されたことは本当にそれらの人工物の本質なのだろうか。人工物にも本質があつて、起源がそのうちの一つだとしても、なぜそれが物質であつて、人工物の製造者や設計者ではないのだろうか。また、原初の物質がそれ以降の物質とは違う特別な位置を占めているとすれば、それは、織田信長やタマにおける始まりと終わりの非対称性が、織田信長やタマについての反実仮想の起点が誕生時の織田信長やタマにあるという事実に由来するように、船や机の可能な状態を想像する際の視点が、完成したばかりの船や机を越えて過去へさかのぼることができないからなのだろうか。

豪華客船、たとえば、クイーン・エリザベス2号の進水式に立ち会ったとしよう。そして、完成したばかりのクイーン・エリザベス2号を見ながら、「これが別の物質によって作られることはありえただろうか」と試してみることにしよう。クイーン・エリザベス2号は実際の物質とは別の物質によって作られることは可能だったのだろうか。現実のクイーン・エリザベス2号の設計図と同じ設計図によって、現実のクイーン・エリザベス2号が製造された造船所と同じ造船所で、現実のクイーン・エリザベス2号を組み立てた人と同じ人によって、現実のクイーン・エリザベス2号が組み立てられた時期と同じ時期に、しかし、現実のクイーン・エリザベス2号を構成する物質とは異なる物質によって組み立てられた船はクイーン・エリザベス2号だろうか。ここで言われている「異なる物質」が単に数的に異なった物質の意味ならば、答えは明白であるように思われる。異なった物質によって作られた船でもそれがクイーン・エリザベス2号であることは可能である。

クイーン・エリザベス 2 号は唯一無二の客船として構想され、構想を実現するために設計され、設計図に従って建造されたものである。目の前にあるのは単なる鉄の塊ではないし、どこにでもあるような一艘の船でもない。これはある特定の意図を実現するために作られた特別な船なのである。だから、これが現実とは別の鉄板によって作られることも可能だったのである。設計図通りに作られた船ならば、どの鉄板が使われようが、それはクイーン・エリザベス 2 号なのである。

この鉄板ではなくあの鉄板によってできていたらそれはクイーン・エリザベス 2 号ではない、などということはあるかないことである。この点で、クイーン・エリザベス 2 号はモナリザのような芸術作品に近い。しかし、モナリザと違って、クイーン・エリザベス 2 号の真の起源を見つけるのは難しい。モナリザにおけるダ・ヴィンチに相当するのは、クイーン・エリザベス 2 号の場合何なのだろうか。造船所だろうか、設計図の中身だろうか、設計者だろうか、豪華客船を作ろうと思いついた人だろうか。クイーン・エリザベス 2 号が別の造船所で作られたり、形や性能が違っていたり、別の設計者によって設計されたり、別の発案者によって構想されたりすることはありえただろうか。はっきりした答えはないと言ふべきだろう。現実のクイーン・エリザベス 2 号が失ってしまえばそれがクイーン・エリザベス 2 号ではなくなるようなクイーン・エリザベス 2 号の唯一の本質的性質を、クイーン・エリザベス 2 号の起源の中に求めることはできないだろう。

ところが、大量生産される人工物となると話が違って来る。目の前に、出来上がったばかりの車、たとえばプリウスがたくさん並べられているとしよう。それぞれのプリウスは大きさも重さもボディーの色も内装の色もすべて同じだ

とする。その中の一台に目をとめて、「これが別の物質によってできていることはありえただろうか」と考えてみよう。たとえば、これが隣のプリウスを構成している物質によってできていることもありえただろうか。隣のプリウスを構成している物質でできた車がこのプリウスであるといったことは可能なことだろうか。こちらは不可能であると思われることだろう。質的に異なることのない数多くの出来立ての車を個別化するのには、車を構成する物質だからである。このプリウスが別の物質によって作られることはできないのである。

ここでテセウスⅡに戻ろう。テセウスⅡはクイーン・エリザベス 2 号の仲間だろうか、それともプリウスの仲間だろうか。テセウスⅡに関するこれまでの記述だけでは判然としない。しかし、たかだか 100 枚の板によって作れてしまう船なのだから、テセウスⅡはプリウスの仲間であると考えたほうが自然かもしれない。すると、テセウスⅡが最初は板 a_1, a_2, a_3, \dots によってできていたとすれば、テセウスⅡがそれ以外の板によって作られることはありえなかったことになるだろう。

中古の船を買ってそれをテセウスⅡと名付けたとき、その船は c_1, c_2, c_3, \dots からできていたのであるが、テセウスⅡは前の所有者が修理をしていなければ a_1, a_2, a_3, \dots のままだったかもしれない。テセウスⅡが実際とは違う板でできている様を想像することは容易にできる。それがこれまでの議論の前提だった。しかし、テセウスⅡは購入時に c_1, c_2, c_3, \dots 以外の板でできていることはありえなかったと思ってみることはどのようにしてもできないのだろうか。買ったばかりの中古船を見ながら「これはこの板以外の板によってできていることはありえないのだ」と思ってみることは不可能だろうか。ある個体であるためにはその個体のどの部分も必要

不可欠であるというメレオロジー的本質主義はとりあえず無視するとしよう。すると、そのように思うことは二つのやり方で可能であるように思われる。

一つは、目の前にある物体を船ではなく特定の板の集まりとして見ることである。「これ」が特定の板の集まりを指すならば、それが別の板の集まりであることはありえない。「テセウスⅡ」が特定の船につけられた名前ではなく、特定の板の集まりにつけられた名前ならば、テセウスⅡが購入時に別の板から成ることはありえなかったことになるだろう。木造の粗末な船だけではなく、クイーン・エリザベス2号でさえ鉄の塊として見るができる。モナリザを色のついた板として見るができるのと同じである。進水式に姿を現したクイーン・エリザベス2号が特定の巨大な鉄の塊に過ぎないとすれば、クイーン・エリザベス2号も別の鉄の塊であることはできないことになるだろう。

そして、テセウスⅡが板の集まりならば、同一性に関する過去と未来の非対称性も消えてなくなる。テセウスⅡの修理といっても、実際に生じているのは板の離合集散だけである。テセウスⅡの過去と未来の想定と考えられてきたものも、実際は板の離合集散に関する想定である。板の離合集散に関してならば、未来についての想定も過去についての想定も、いずれも可能な事態についての想定であることになるだろう。さらに、船や机に加えて人や動物も実際は物質の集積にすぎないということになれば、人や動物の同一性に関する過去と未来の非対称性も消えてなくなるだろう。

もう一つは、目の前にある船は瞬間的な存在者であると考えてみることである。宇宙にあるすべてのものは、車も船も板も原子も素粒子も、何もかもが生まれては消え生まれては消えているのだと考えてみよう。テセウスⅡは生成消滅

を繰り返しているのである。テセウスⅡを前に、今ここに生成したこの板の代わりに、これと同じ種類ではあるものの数的には異なる板がこの瞬間のこの場所に生成したかもしれない、と試してみることはできるだろうか。別の板がすでにどこかに存在しているのならば、それが今ここに出現することもできるだろうが、この世界ではすべてが刻々と生成消滅するのである。瞬間ごとに生成する同じ種類の板を個別化するのは、それぞれの生成の場所と時間でしかない。したがって、この世界では、目の前にある板と同じ性質の別の板が今ここに出現するという事態を思い描くことはできないのである。

この世界が物が生成消滅する世界ならば、目の前にあるのはテセウスⅡの時間部分であることになる。テセウスⅡは目の前にある船の時間部分をその一部とするさまざまな時間部分の集合である。生成消滅の世界でもやはり同一性に関する過去と未来の非対称性は生じないだろう。過去と未来に存在する無数のものの時間部分のどれが目の前のテセウスⅡの時間部分と一緒にテセウスⅡの全体を構成するかは任意に決めることができるかもしれないからである。

しかし、私には物が絶えず生成消滅を繰り返していると信じる理由があるとは思えない。船も車も人も猫もみな、どの瞬間をとってもその全体が丸ごと存在していると私は信じている⁴。また、私は今のところ、人や猫だけではなく車や船も存在していると信じている⁵。こうした私の信念が正しいとすれば、大量生産される規格品に関しては、特定の物質によって作られたことがそれぞれの製品の本质となることだろう。

それに対して、東京タワーや自由の女神像は、おそらくクイーン・エリザベス2号のように、その本質がそれらを形成する物質以外のものに求められるような存在者であるだろう。少なくとも、東京タワーが別の鉄骨によって組み立て

られることは可能であっただろう。

一方、世界に一つしかないものでも、特注の犬小屋や手編みのマフラーとなるとわからなくなってくる。ある人が編んだマフラーにとって、それが特定の糸でできていることはその本質なのだろうか。あのマフラーが別の糸でできていることはありえただろうか。あるいは、別の人が同じ糸で同じやり方で編んだマフラーはあのマフラーでありうるだろうか。また、ある人が特定の人を念頭に置きながら思いを込めて編んだマフラーは製作者がその本質であるのに対して、単に編み物の練習のために編んだマフラーは糸がその本質となる、などということがあるものだろうか。

こうした問いに答えるための明確な基準があるのかどうかわからない。人工物にはクイーン・エリザベス2号型とプリウス型があるということは確かだとしても、どちらに属するか不明なボーダーライン・ケースもたくさん存在するのかもしれない。最終的にはすべてのものがどちらかに分類されるのかもしれない。いずれにせよ、このような判別基準の問題は、個体の本質をめぐる問いとしては、おそらく、それほど興味深いものではないだろう。

注

- 1 特定の彫刻が現実とは別の物質によって製作される可能性についてはジュビアン(Jubien, 2009, chap. 5)が指摘している。
- 2 たとえば、ヌーナン(Noonan, 2013, p. 144)はウィギンズの次の一節を例として挙げている。

おそらく、理論家は、もしカエサルの両親や起源を変えてしまったら、彼は言説の主

題(カエサル)を見失ってしまうことになるだろう、といった批判に反論することができなくてはならないだろう。しかし、私は次のように問いたい。彼は、ブルートゥスによって紀元前44年に暗殺された男の親が、たとえばマリウスだったとしたら、その男はいったいどのようになっていたのだろうか、と考えているところなのだ、と主張することによって、批判に反論することができるのではないだろうか(Wiggins, 2001, p. 132)。

- 3 二つ目の立場はライブニッツによって代表されるだろう。また、デカルトの実体二元論を三つ目の立場に属すると解釈することもできるかもしれない。この立場の現代における代表者はプランティンガ(cf. Plantinga, 2003)である。ライブニッツ的立場とプランティンガ的立場に対する批判としては星野(2010)を参照されたい。
- 4 物は時間部分を持つとする四次元主義に対する批判については星野(2013)を、物は生成消滅を繰り返すことによって持続するという世界像に対する批判については星野(2014)を参照されたい。
- 5 人工物が存在することを否定するのはヴァン・インワゲン(van Inwagen, 1990)である。

文献表

- 星野 徹(2010)、「同一性とこのものの性」『埼玉大学紀要 教養学部』第45巻第2号。
- 星野 徹(2013)、「持続と同一性」『埼玉大学紀要 教養学部』第49巻第1号。
- 星野 徹(2014)、「存在することと無から生じること」『埼玉大学紀要 教養学部』第49巻第

2 号。

Jubien, M. (2009), *Possibility*, Oxford University Press.

Kripke, S. A. (1980), *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (『名指しと必然性』、八木沢、野家訳、産業図書)

Noonan, H. (2013), *Kripke and Naming and Necessity*, Routledge.

Plantinga, A. (2003), *Essays in the Metaphysics of Modality*, Oxford University Press.

van Inwagen, P. (1990), *Material Beings*, Cornell University Press.

Wiggins, D. (2001), *Sameness and Substance Renewed*, Cambridge University Press.